

# 輝け光星ナイン 第100回夏の甲子園へ

「隙のない野球で勝利したい」。夏の甲子園出場が懸かった青森大会の期間中長南佳洋主将をはじめ、八学光星ナインから何度も聞かされてきたフレーズだ。

「試合どうものものは、一切気を抜くところはないんだ」と仲井宗基監督。走攻守どんな時も最後まで全力でプレーすることだ」と、隙のない野球の意味について解説した。

例えば、ピッチャーゴロの場面。明らかに一塁ベースに間に合わなくても、全力疾走することが、相手の守備にプレッシャーをかけることになり、エラーを誘うかもしれない。今回はアウトでも、次の打者、次のインニングで好プレーにつながる可能性もあるからだ。

「奇跡的プレーは『奇跡』だと思っから生まれない。『起るかもしれない』と信じて手を抜かないことで、確率は上がる」と仲井監督。相手のミスも偶然ではなく、必然だと選手たちに言い聞かせている。

## 「隙のない野球」で圧倒



校歌を歌った後、スタンドに駆け寄り八学光星ナイン  
＝22日、弘前市はるか夢球場

### 最後まで全力プレー

「隙」に対する意識は、選手にも根付いている。20日の準決勝で、ライバル・青森山田に大勝したが、試合後の主戦福山優希は勝利を喜びつつも「ここからの過ごし方がとても大事」と油断することはなかった。

「前は調子に乗ってしまは隙がなくなったと言えるだ

ろう。5試合を戦った青森大会で打率は4割を超え、切れ目のない強力打線を誇った。オーダーを組む上で、「穴」になりがちな2、7、8番を担った武岡龍世、下山昂大、秋山龍生が大会中に打線をつなぐ役割を果たした。

特に、打率5割・12打点と大活躍した武岡に対し、仲井監督も「2番打者には犠打や走塁などマルチな活躍が求められる。武岡の成長がチームに与えた影響は大きい」と評価が高い。

青森大会では失策1にとどまり、堅守の一面にもスポットが当たった。遊撃手武岡と二塁手近藤俊太の二遊間コンビに加え、守備範囲の広い中堅手長南など駒がそろった。同大会決勝前、記者会見で仲井監督は「地に足を着けて守れている」と、守備の固さも勝ち進んだ要因に挙げた。

光星が夏の甲子園で準優勝を成し遂げた11年のチームは青森大会を失策0に抑えた。今年のチームはこれに次ぐ格好となっており、仲井監督は8月5日に開幕する夏の甲子園に向け、「安定感は今時と同レベル」と自信を垣間見せる。  
(金濱千優希)